

## 研究主題

# 自尊感情や自己肯定感に関する研究

－幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方－

## 目 次

I	研究の背景とねらい	
1	研究の背景	4
2	自尊感情のとらえ方と研究の方向	6
3	研究のねらいと構想	8
II	研究の方法	
1	基礎研究	9
2	調査研究	9
3	開発研究	9
III	研究の内容と結果	
1	基礎研究	9
2	調査研究	12
3	開発研究	15
4	研究の考察	22
IV	研究の成果と課題	
1	研究の成果	23
2	研究の課題	23
○	参考資料	24

## 研究の成果と活用

- 1 幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点の明確化  
学校等の日常の指導・援助をはじめ、各教科等の指導において、幼児・児童・生徒の発達段階に応じて、自尊感情を高めることに視点をおいた指導のポイントを明らかにした。
- 2 児童・生徒の自尊感情の傾向の把握  
調査研究結果から児童・生徒の発達段階や自分に対する評価の傾向を把握することができ、自尊感情を高めるための指導に活用することができる。
- 3 自尊感情を高めるための指導モデルの開発  
学校等において、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための指導モデルを活用することによって意図的・計画的な指導・援助や授業改善を図ることができる。

## I 研究の背景とねらい

### 1 研究の背景

#### (1) 社会的な背景

情報化、核家族化、少子化等の社会変化にともない、子供たちを取り巻く環境の中で、人間関係の希薄化が様々な課題を生んでいる。特に、生命を尊重する態度の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識や人間関係を形成する力の低下など、子供の心の活力が弱ってきていると言われている。

「次代を担う自立した青少年の育成に向けて－青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について－（答申）」（平成19年1月 中央教育審議会）では、「第2章 青少年の意欲をめぐる現状と課題」の中で、青少年の様相とその原因として、「意欲を行動に移す段階でのつまずき」を挙げ、「意欲を持っているが、行動することへの負担感が大きいなどの理由により、意欲を実現するための行動に移せず、行動する前にあきらめている」、「意欲を持っており既に行動したが、失敗したこと等による徒労感、絶望感から抜け出せず、改めて挑戦しようとする意欲を持って行動できない」と述べている。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月 中央教育審議会）では、「7. 教育内容に関する主な改善事項（4）道徳教育の充実」の中で、「今日、社会規範全体が大きく揺らぐといった社会の大きな変化や家庭や地域の教育力の低下、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場や自然体験等の体験活動の減少などを背景として、生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、基本的な生活習慣の確立が不十分、規範意識の低下、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成が不十分などといった指摘がなされている」とし、子供たちをめぐる課題を投げかけている。

児童・生徒等の心を育て、豊かな人間関係を築き、「生きる力」をはぐくむことは重要な教育の使命となっている。

#### (2) 日本の子供たちの状況

「国際比較・日本の子供と母親－国際児童年記念最終報告書」（昭和56年 総理府青少年対策本部）では、子供たちの自己評価が国際的に見て著しく低いこと、自己評価が他者との相对比较に影響されており、学習して豊かになるという自分を実感できないでいること等が示されている。また、「第7回世界青年意識調査報告書」（平成16年1月 内閣府）では、自分自身が誇れるものについて、すべての項目で、韓国やアメリカ等の諸外国に比べて低い割合となっている。逆に「誇れるものはない」と回答した割合は8.3%であり、5か国中、一番高い割合となっている。

（図1参照）

さらに、財団法人日本青少年研究所の調査では、次のような結果が見られる。

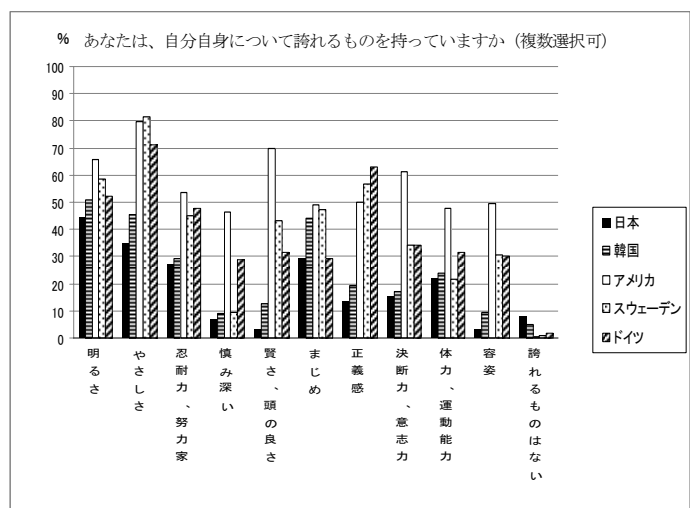


図1 第7回世界青年意識調査報告書(平成16年1月 内閣府)

「高校生の未来意識に関する調査－日本・アメリカ・中国の3ヶ国の比較－」（平成14年5月）の中で、「自分は他の人々に劣らず価値のある人間である」という設問に対して、「よく当てはまる」「まあ当てはまる」と答えた割合が、アメリカでは約89%、中国では約96%であったのに対し、日本では約38%と低い割合であったことが示されている。その他の設問についても、同様に消極的な結果が出ている。

「高校生の学習意識と日常生活調査 日本・アメリカ・中国の3ヶ国の比較」（平成17年3月）では、自分の生活についての自己評価として、「物事に積極的に取り組むほうだ」、「私はリーダーシップをとるのが好きだ」、「よく勉強するほうだ」等、肯定的な回答をした割合が3か国の中で最も低い値となっている。

さらに、「高校生の意欲に関する調査－日本・アメリカ・中国・韓国の比較－」（平成19年4月）では、生活意識として「暮らしていける収入があればのんびりと暮らしていきたい」の項目の割合が高く、アメリカや中国の「挑戦してみたい」や韓国の「自分の力を発揮したい」の結果とは異なり、消極的な姿勢が見られる。また、偉くなることについては、「責任が重くなる」や「自分の時間がなくなる」等と感じており、偉くなりたいと強く思う割合は、8.0%と他の国に比べて、非常に低い値となっている。

このように、国際的な子供の意識調査の結果から、アメリカや中国等の諸外国と比べて、日本の子供たちは、消極的であり、自己に対して肯定的な回答をする者の割合が低いことが明らかになっている。謙虚さを大切にする日本の文化的な背景に起因していることが考えられるが、グローバル化が進むこれからの社会で活躍する日本人を育成するために、自分のよさに自信をもって行動できるよう、自尊感情や自己肯定感を高めていく教育を推進していくことが課題であると考えられる。

### (3) 東京都の教育施策

東京都教育委員会の教育目標では、育成する人間像として『互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間』、『社会の一員として、社会に貢献しようとする人間』、『自ら学び考え行動する、個性と創造力豊かな人間』を挙げ、社会の変化に対応して絶えずその在り方を見直すこと、経済のグローバル化、情報技術革命、地球環境問題、少子高齢化など、時代の変化に主体的に対応し、日本の未来を担う人間を育成することの重要性を述べている。

「東京都教育ビジョン（第2次）」（平成20年5月）では、「Ⅲ 3つの視点に基づく取組の方向・重点施策・推進計画」「3 子供・若者の未来を応援する」「(12) 首都東京・国際社会で活躍する日本人の育成」の中で次のように述べ、自尊感情を高めることが重要であることを示している。「他者との人間関係をつくることが不得手になっている子供が増え、そのことがいじめや不登校などの問題の一因にもなっているとの指摘がある。（中略）また、自分をかけがえのない存在、価値ある存在として肯定的にとらえる気持ちを自尊感情というが、自尊感情が高まると、子供たちは自分を大切にすることができ、物事に積極的に取り組んでいくことができるようになる。」

同じく「重点施策25 人間関係を築く基礎となる力の育成」では、「子供たちが自分のよさに気付き、自信を持つことや、他者と積極的にかかわり、自分や相手の考えを相互に伝えたり理解したりするコミュニケーション能力は、人間関係を築く基礎となる力であり、国際競争の

激しいこれからの社会を生きていく上で極めて大切な力である。」とし、「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を重視し、子供一人一人が自己に自信をもち、新たなことや困難なことにも挑戦しようとする意欲を高める教育を推進することを示している。

このことから、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための指導の在り方を研究することは、これからの教育にとって重要なことであると言える。

#### (4) 東京都の児童・生徒の状況

平成19年度に国が実施した「全国学力・学習状況調査」によると、「自分には、よいところがあると思いますか」との問いに、「当てはまらない」又は「どちらかといえば当てはまらない」と答えた東京都の児童・生徒は小学校6年生29.4%、中学校3年生39.6%であった。(図2参照)小学生の約3割、中学生の約4割が、自分のよさに自信をもてないでいることが分かる。

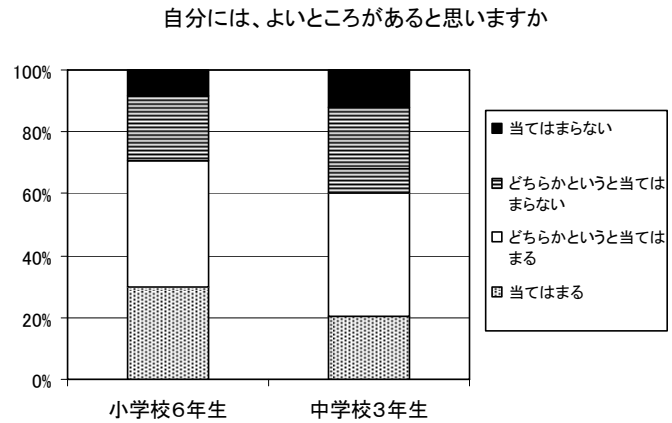


図2 全国学力・学習状況調査報告書(平成19年12月 東京都教育委員会)

これからのグローバルな時代を生きていく子供たちが、国際社会で活躍し、豊かな社会を形成していくためには、子供たちが自分のよさに気づき、自信をもち、他者と積極的にかかわって豊かな人間関係を築いていく力を高めることが大切である。そのことが、社会における個人の役割や責任に対する自覚を涵養し、社会への参画意識を高めていくことにつながると考える。

また、自信や意欲を支える自尊感情は、学業達成の要因と正の相関があることが、一部の研究で示唆されている。例えば、自尊感情の高い人ほど内的帰属傾向(自分の能力や努力等に関連付けてとらえること)が高く、失敗を自分の課題としてとらえ、さらに努力を重ねていく意欲や姿勢があることから、自尊感情は学業達成に媒介的に作用すると考えられると述べられている。このことから、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めることは、学力の向上による影響を及ぼすとともに、これからの社会で必要とされる「生きる力」をはぐくむことにもつながることだと考えられる。

以上のことから、学校教育においては幼児・児童・生徒が自尊感情や自己肯定感を高め、一人一人が自分に自信をもち、新たなことや困難なことにも挑戦しようとする意欲を高めるための指導の工夫が必要である。このことは、いじめ問題やニート等の問題の解決はもとより、教育基本法に示されている人格の完成を目指す教育の実現にもつながるものであると考える。

## 2 自尊感情のとらえ方と研究の方向

### (1) 自尊感情のとらえ方

心理学の領域では、自尊感情を「自己評価の感情」とする考え方に基づいてとらえている。

自尊感情については、多くの研究があり、自尊感情を自分にとって「価値ある領域」における願望を分母に、成功を分子とする分数で表現し(成功/願望)、願望と成功との間に大きな差があれば、自尊感情は育成されないと述べているものや、自尊感情を「自己概念に含まれている情報を評価することであって、今の自分に関するすべての事柄について自分が抱えている感情から出てくるもの」と位置付け、現実の自己と理想的な自己との矛盾(ズレ)の大小が自

尊感情の高低に影響すると述べているものもある。

今回の研究では、特に心理学者ローゼンバーグのとらえ方を重視した。ローゼンバーグは自尊感情について、二つの異なる意味について述べている。一つは自分を「とてもよい (very good)」と考えるもの、もう一つは自分を「これでよい (good enough)」と考えるものである。前者は完全性や優越性を含む感覚であり、他者との比較関係を基にした「優劣」を基準に置いている考え方であると説明している。それに対して後者は、自分なりの満足を感じる感覚であり、自分の中の価値基準をベースとして自分を受容する考え方であり、そこには他者と自分との比較による優劣という意識は含まれていないと述べている。

ローゼンバーグのいう「very good」な自尊感情は、他者との比較の中で自分を肯定的にとらえようとする感情である。そこでは優越性という感覚と切り離すことができず、形成される力は「〇〇と比較して自分は優れている」という、他者や社会的な基準を強く意識したものとなる。そして肯定的な評価を受けられないと、自分の優越性を感じるができないために、ますます他者や社会的な基準から自分を評価してしまうようになると考えられる。

自尊感情は、他者や社会的な基準を内在化することで獲得する優越性と切り離せない感情であるが、大切なことは、単なる優越性ではなく、自他に対する理解ができ、自分の否定的な面も受け入れることであると考えられる。その意味では、ローゼンバーグのいう「good enough」の考え方と、研究の求める方向性は一致している。

以上のことから、本研究では、自尊感情を自分の否定的な面を受容するとともに、前向きに取り組む、様々な影響の中で自分を見失わず、可能性を信じて行動できる幼児・児童・生徒の育成を目指し、「自分をかけがえのない存在だと思う気持ち」ととらえた。

## (2) 自己概念への着目

自尊感情に大きく影響する要因は、周りの人からの評価（学習や振る舞い、容姿等）であると考えられている。このような周りの人からの評価によって青少年は自信をもって行動することができたり、場合によっては自信を失い、自分の行動が左右されてしまったりする。これは、自分の生き方や考え方、存在に対する実感が自分の中で明確に位置付けられていないことや困難に直面した時に、自分の力に応じた解決方法等を見付けることができないことが原因ではないかと考えられる。

また、現実の自己に基づいた自己概念をつくることが大切であるとする研究もあり、その中では、理想から離れて現実の自己を直視し、それを受け入れるということが「健康な人間の姿である」と説明している。また、学級集団において子供の好ましい自己概念を育てることが高い自尊感情を形成させることになる、と理論化している。

こうした点を踏まえ、本研究では自己概念を形成していくことが、幼児・児童・生徒の自尊感情を高める上で重要であると考えた。何より、自尊感情を高める上で、まず子供たちが、「自分の否定的な面を受け止めること」「前向きに取り組むこと」「自分の可能性を信じて努力すること」等、自分の内面を高めていくことが大切である。このことから、学校教育において、幼児・児童・生徒が自分の個性や役割等を理解したり、発揮したりすることを通して、他者とのかかわりを広げ、将来の可能性を信じて行動できるようになるための指導・援助の充実を図ることが重要であると考えた。以上のことから、自己概念の形成の過程に着目した。

### 3 研究のねらいと構想

#### (1) 研究のねらい

本研究では、幼稚園から高等学校の指導において、幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点を明確にし、指導の充実を図る指導資料の開発をねらいとした。

#### (2) 研究の構想



## Ⅱ 研究の方法

### 1 基礎研究

文献研究により、(1)発達段階における幼児・児童・生徒の考え方や行動の特徴、(2)自己概念の形成段階、(3)自尊感情に影響する要因を整理し、自尊感情や自己肯定感を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点を明確にした。

### 2 調査研究

児童・生徒の自己に対する評価の傾向を明らかにすることをねらいとして、都内公立小・中学校及び都立高等学校の児童・生徒を対象に質問紙法により実施した。また、教員を対象に児童・生徒の自尊感情を高めるための指導の状況について調査した。

### 3 開発研究

基礎研究及び調査研究を基に、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」及び「自尊感情を高めるための指導モデル」を開発した。

なお、開発した資料については、都内公立幼稚園、小学校、中学校及び都立高等学校において検証授業を実施し、その有効性を検証し改善を図った。

## Ⅲ 研究の内容と結果

### 1 基礎研究

#### (1) 自尊感情を高めるための指導・援助における5つの観点

本研究では、自尊感情を高めるために、幼児・児童・生徒の発達段階に応じた自己概念の形成段階に着目し、自尊感情を高めるための観点を導き出すことが必要であると考えた。

文学博士 梶田叡一氏によると「自己概念」とは、「私は、～である。」「私は、～が得意である。」という毎日毎日の積み重ねの中で、少しずつ形成され、発展していくものであり、包括的で安定したものである。とし、自己概念は大きく次の5つによって構成されていると述べている。

- 自己の現状の認識と規定
- 自己への感情と評価
- 他者から見られていると思う自己
- 過去の自己についてのイメージ
- 自己の可能性・志向性のイメージ

さらに、梶田氏は、自己概念を形成するために教育が志向すべき目標として、

- ①自分自身について多面的に知り、理解し、自己の現実を基本的にはそのままの形で受容できるようになること（自己理解、自己受容）
- ②自我防衛的で自己中心的な自尊感情を捨て、現実的に開かれたプライドと自信を持つようになること（プライド、自信）
- ③自分自身のあるべき姿、目指すべき姿について、柔軟ではあるがしっかりした方向性のあるイメージを形成すること（自己についての当為、願望、使命）
- ④自分自身のはらむ可能性について、基本的にはどこまでも開かれたものであるという実感を持ち、そういった可能性を現実化するために、機会を探し、試みをおこない、努力する、という姿勢を持つようになること（自己の可能性への信頼と実現への志向）

- ⑤自分自身が人々や自然によって支えられ、生かされているということを実感し、そういった自己観、世界観を持つようになること（生かされている自己の実感）
- ⑥他の人も皆、自分と同じように、自分自身のことで一喜一憂し、自分自身が世界の中心にあるかのように考え、こだわらざるをえない存在である、ということを理解するようになること（他者の自己概念の一般的なあり方に関する理解）
- ⑦自分自身がずっと過去から未来へと向かって一貫して存在するものであると同時に、実存し機能しているのは、「今」「ここ」の自分でしかない、ということを実感し理解するようになること（時間的流れの中での一断面としての自己存在）
- ⑧自分自身が他の人のために、また自然界をも含めた世界のために役立ち得るということを実感し、また実際に役立つべく努めるようになること（世界に寄与し得る自己の実感）

の8点を示し、幼稚園から小・中・高等学校へと、幼児・児童・生徒の自己概念を形成し変容していくような一貫した教育的取組が必要であると述べている。

以上のことから、本研究では、自尊感情を高めるために指導・援助で留意することとして、

- ・自分の存在に気付くとともに、自分のことを受容すること
- ・自分の役割を理解し、存在感を感じる
- ・自分の個性を認めるとともに、他者の多様な価値観を認めること
- ・自分が周りの人に支えられた存在であることを理解し、感謝すること
- ・自分の可能性を信じ、努力すること

の5点が重要であると考えた。そして、この5点を基に、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための観点を以下のように設定し、発達段階を踏まえた上で指導・援助における具体的な留意点について検討していくこととした。

A 自分への気付き

自分ができたことや頑張ったこと、得意なこと、よさ等に気付くとともに、自分の行動や考え方を受け止め、自信をもつ。

B 自分の役割

集団や様々な人間関係における自分の役割に気付くとともに、周りの人のために役に立っていることを理解する。

C 自分の個性と多様な価値観

自分の考え方や行動そのもののよさを理解するとともに、周りの人の多様な考え方を知り、受け止める。

D 他者とのかかわりと感謝

多様な集団の中で活動し、人とのかかわりを広げるとともに、周りの人の支えがあって自分の活動が充実していることを理解し、感謝の気持ちをもつ。

E 自分の可能性

自分の行動の達成感を感じるとともに、失敗や困難は自分一人だけではないという安心感を持ち、努力すればできるという自分への可能性をもつ。

また、この5観点については、教科・領域等や集団・個に対する指導・援助の区別にかかわらず、あらゆる場面で留意することが重要であると考えた。



この5観点を踏まえた指導・援助を工夫していくことで、幼児・児童・生徒は、自分を適切に理解することができるようになり、自分の考えをもち、積極的に自分を表現するとともに、他者の思いや願いを受け止め、豊かな人間関係を築いていくことができるようになる。また、この5観点を踏まえることで、教員が授業の導入の仕方や教材の作成等、改善するポイントが明確になり、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための視点に立った授業改善を図ることができる。このことによって、幼児・児童・生徒の学力が向上するとともに、学習への意欲が高まり、すすんで学習する態度も育成されることが期待される。

**(2) 幼児・児童・生徒の発達段階のとりえ方**

幼児・児童・生徒の発達段階については、次の研究者らの研究を基にした。

心理学者マズローが提唱した欲求段階説では、人間の欲求はピラミッド状の5つの段階になっており、底辺から始まり1段階目の欲求が満たされると、もう1段階上の欲求へと徐々に満たされていくように動機付けられているとしている。

人間の欲求の段階は、底辺から

- ①生理的欲求
- ②安全の欲求
- ③社会的欲求
- ④自我・自尊の欲求
- ⑤自己実現の欲求

となっており、第4段階に、自我・自尊の欲求があり、自己実現に向けた過程の中で、自分自身及び他人から認められたり尊敬されたりすることが重要であると言える。つまり、自尊感情をもつことは、自己実現に向けた成長過程において重要であることを示している。

心理学者エリクソンは、フ

表1 発達のとらえ方

ロイトの発達段階をベースに考え、社会との関係を組み込んだ新しい発達段階を明確にした。(表1参照)

また、心理学者ピアジェは、表1のように発達段階をとらえ、比較的低年齢のうちに発達

	エリクソン	ピアジェ
0歳～2歳	基本的信頼 対 基本的不信 [希望]	感覚運動期
2歳～4歳	自律 対 恥・疑惑 [意志]	
4歳～7歳	自発性 対 罪悪感 [目的]	具体的操作期
7歳～12歳	勤勉 対 劣等感 [適格]	
12歳～	同一性 対 役割の混乱 [忠誠]	
		形式的操作期

達は完了し、それらは生涯にわたって生かされると考えた。

これらの研究とともに、「人権教育プログラム(学校教育編)平成20年3月 東京都教育委員会」や健全育成推進資料(昭和63年 東京都教育委員会)等がとらえる幼稚園から高等学校までの発達段階の特徴も参考にしながら整理した。

その結果、本研究では、発達段階として次のページに示すような4段階に整理し、それぞれの特徴をとらえ、幼児・児童・生徒の発達段階に応じて、自尊感情を高めるための観点とのかかわりを踏まえながら、教員が各教科等の指導・援助において留意する内容を明らかにしていくこととした。この中で、小学校教育【児童期】については、学校での活用の在り方を踏まえ、「低学年」・「中学年」・「高学年」の3期に分けて示した。

**I 就学前教育【児童前期】**

自分は愛されていると思うとともに、みんなと一緒に行動する一人であると感じ、自分のことを大切にしようとする。

**II 小学校教育【児童期】**

低学年：自分の行動が役に立っていると思うとともに、周りの人から認められていると思える。

中学年：自分が頑張ったことや満足したことが正しいと感じるとともに、得意なことがあると思える。

高学年：様々な考え方があがるが、自分のよいところは、みんなにとって役に立っていると思うとともに、自分の力でできることがあると思える。

**III 中学校教育【思春期】**

他の人は自分と異なる個性をもった大切な存在だと思うとともに、自分も個性をもった周りの人にとって大切な存在だと思える。

**IV 高等学校教育【青年期】**

組織や集団の中で、自分の特性を生かすことができるものがあると思えるとともに、多様な価値観が認められていると思える。

発達段階については、明確に区切るというより、発達の特徴や目標とする幼児・児童・生徒像を示しており、段階的に獲得していくことができるように指導・援助を工夫することで、効果的に自尊感情が高まっていくと考える。

これらのことを踏まえ、本研究では、「自尊感情を高めるための5観点」及び「幼児・児童・生徒の発達段階」を基に、各学校における、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の配慮事項を示し、指導の改善・充実に資する資料を開発することとした。

**2 調査研究**

**(1) 調査概要**

① ねらい

児童・生徒の自尊感情の傾向を把握する。

児童・生徒の自己評価に対する教員のとらえ方及び指導の状況を調査する。

② 調査内容・方法

児童・生徒に対して、ローゼンバーグや心理学者ポープの自尊感情測定尺度等を参考に、18項目を設定し、質問紙法により調査を行った。

教員に対しては、「児童・生徒の自尊感情」や「指導の重点」等、合計3設問を設定し、質問紙法により調査を行った。

表2 回収数

③ 調査時期

平成20年11月から12月

④ 調査対象

	小学校	中学校	高等学校
児童・生徒	4,030名	2,855名	5,855名
教員	162名	175名	373名

都内公立小学校、中学校及び都立高等学校 各10校の全児童・生徒及び教員を対象に調査を行った。(表2参照)

(2) 調査結果

調査は、各項目に対して「4：そう思う」「3：どちらかというと思う」「2：どちらかというと思わない」「1：思わない」の4段階を設定し、回答を集計した。

① 児童・生徒の意識

児童・生徒の自尊感情の傾向をとらえるために、全18項目を平均したグラフを示した。このグラフから、自分を肯定的に評価する感情が、小学校第1学年から中学校第1学年まで次第に下がり、中学校第3学年で上がるが、再び高等学校で低くなる傾向が見られる。学年が進むにしたがって、自分を低く評価する傾向があること、中学校の第3学年で上昇することが分かる。(図3)

「自分には得意なことがある」「自分にはよいところがある」「自分のことが好きだ」の項目では、いずれも小学校から徐々に下がるが、中学校第3学年で上昇する傾向が見られる。(図4)

「A 自分への気付き」に関する項目では、小学校第6学年まで徐々に下がり、中学校第1学年で大きく下がる傾向が見られる。しかし、中学校第3学年で上がり、再び高等学校で下がり、3年間はほとんど変化が見られない。全体的に、自分のよさに気付いたり、自信をもったりすることについて、中学校と高等学校では低く評価する傾向が見られる。

(図5)

「B 自分の役割」では、「A 自分への気付き」と同じような傾向が見られる。小学校第6学年から中学校第1学年で大きく下がり、中学校第3学年で上がる傾向がある。高等学校では、大きな変化が見られな

【注】

\*印は、統計上、有意差が見られたことを表す。グラフは、1.00から2.00の目盛りを省略して示している。

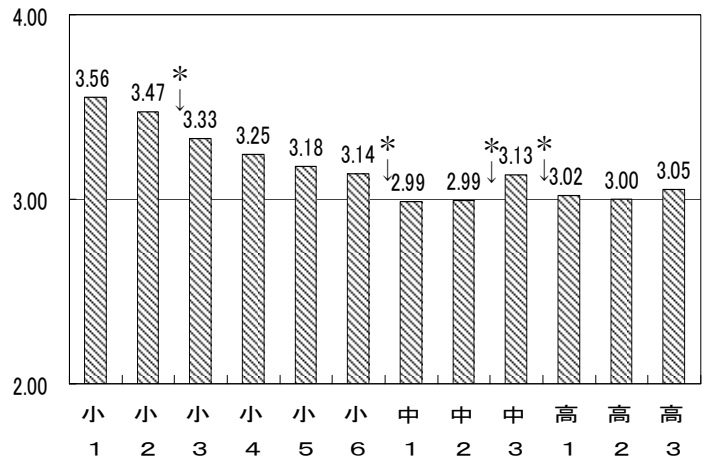


図3 自尊感情に関する調査 (項目全体)

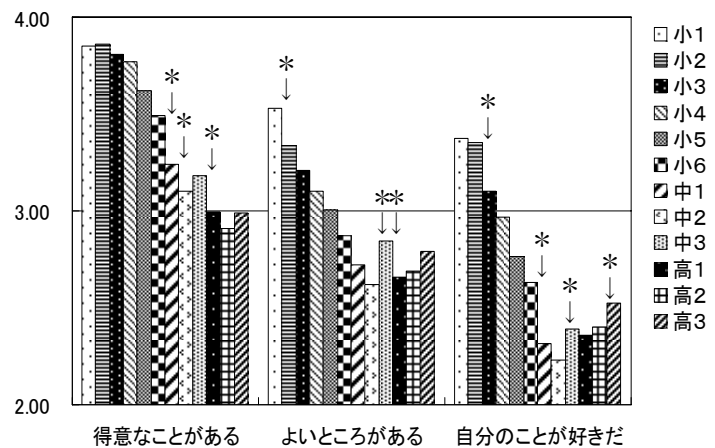


図4 「自分には得意なことがある」「自分にはよいところがある」「自分のことが好きだ」

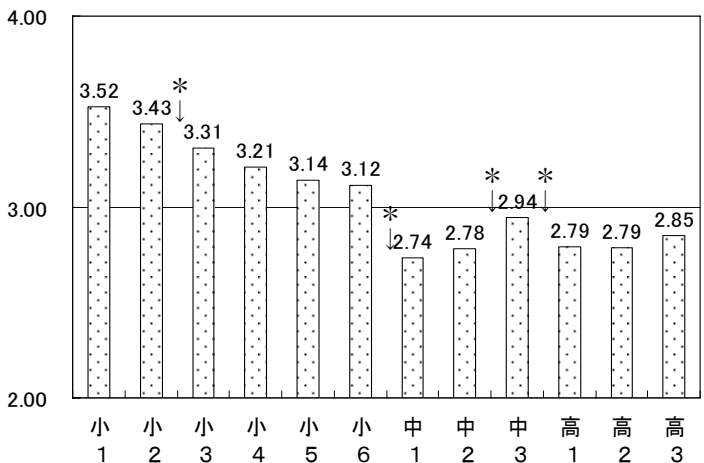
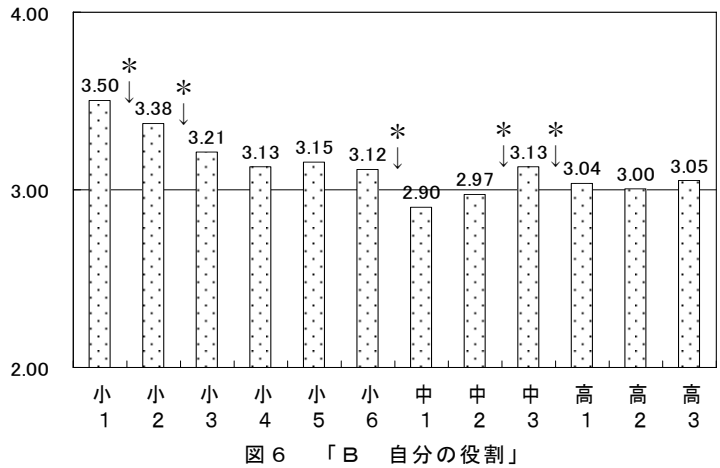
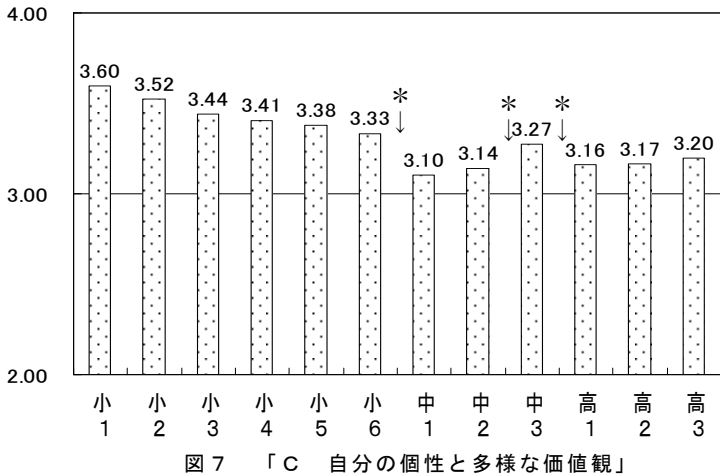


図5 「A 自分への気付き」

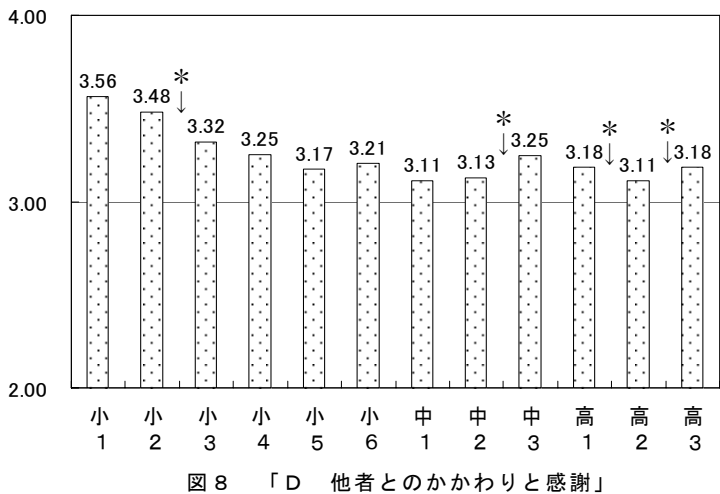
い。自分の役割を自覚することについては、小学校第6学年と中学校第1学年の間に、指導上、配慮が必要であると考えられる。(図6)



「C 自分の個性と多様な価値観」では、「A 自分への気付き」と同じような傾向が見られる。自分自身を受け止めたり、周りの人の多様な考え方を受け止めたりすることについては、全体的に高い傾向であることが分かる。ただし、小学校第6学年から中学校第1学年の間で、大きく下がり、不安や戸惑いがあることがうかがわれる。(図7)

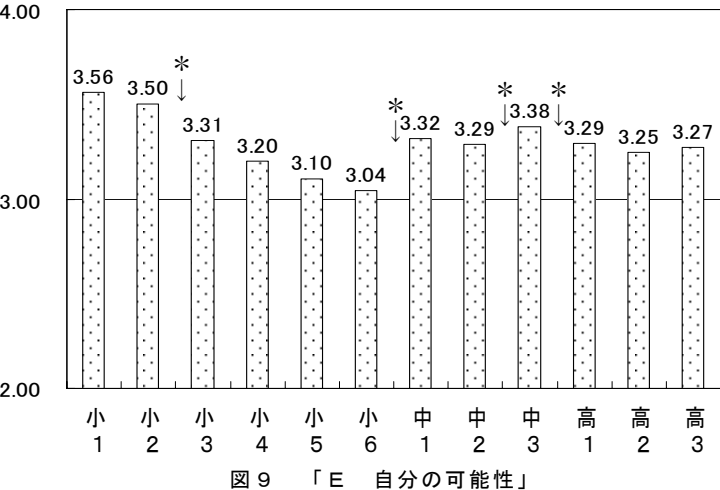


「D 他者とのかかわりと感謝」では、「A 自分への気付き」と同じような傾向が見られる。多様な集団の中でかかわりを広げたり、周りの人への感謝の気持ちをもったりすることについては、小学校から高等学校まで、他と比べて大きな差は見られない。(図8)



A～Dのいずれにおいても、中学校第3学年で上昇が見られる。調査時期が11月から12月であったことから、進路とのかかわりが推測されるが、詳細については今後、さらなる分析を要する。

「E 自分の可能性」では、他の項目とは違った傾向が見られる。小学校では、学年が進むにつれて下がり、第6学年で一番低い結果となっている。中学校及び高等学校では、3.00学年の差はほとんどなく、比較的高い数値となっている。自分への可能性を感じることは、中学校や高等学校での指導等と関係していると考えられる。(図9)



② 教員の意識

児童・生徒の自己評価に対する教員のとらえ方及び指導の状況等について校種ごとにまとめた。

自尊感情を高めるための指導については、どの校種も5観点にかかわる指導について、教員は概ね行っていると考えている結果であった。

「児童・生徒の自尊感情は低いと思うか。」の項目では、小学校及び中学校の教員は、「低いと思う」「どちらかというと思う」の割合が高かった。高等学校の教員は、比較的「低いと思わない」と感じる割合が高かった。(図10)

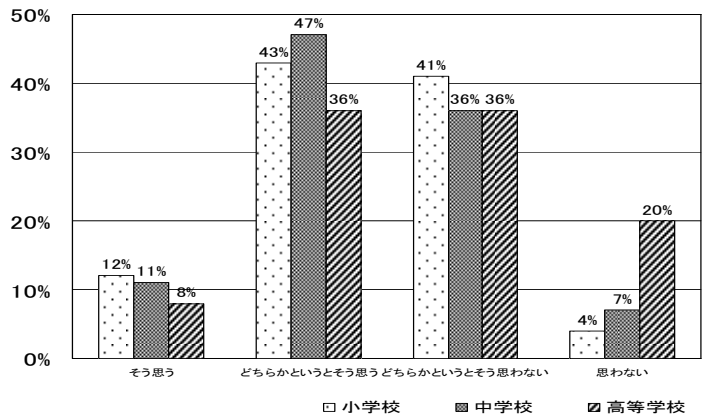


図10 「担当する児童・生徒の自尊感情は低いと思うか。」

<教員と児童・生徒の意識の比較>

注 A: 「自分への気付き」 B: 「自分の役割」 C: 「自分の個性と多様な価値観」 D: 「他者とのかわりと感謝」 E: 「自分の可能性」

<教員と児童・生徒の意識の比較>

教員は担当する児童・生徒が図11のように自己評価しているととらえていることが分かる。児童・生徒の結果は図12のとおりであり、教員は児童・生徒による自己評価よりも低くとらえている傾向が見られる。特に、「C 自分の個性と多様な価値観」と「E 自分の可能性」の項目が、教員と児童・生徒の意識の差が大きい。この児童・生徒の意識を踏まえることは、今後の有効な指導につながると考えられる。

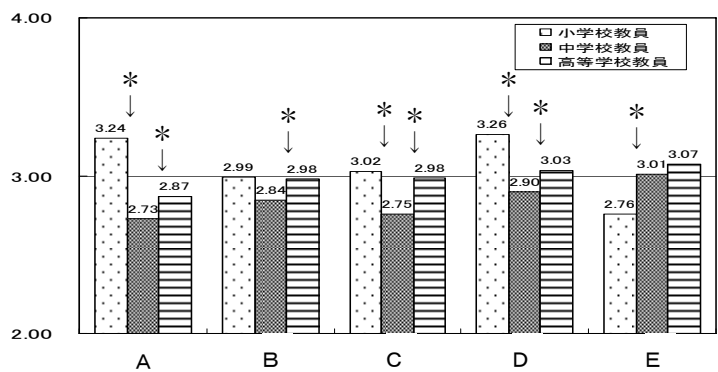


図11 教員の意識「担当する児童・生徒は、どのような状況であると思うか。」

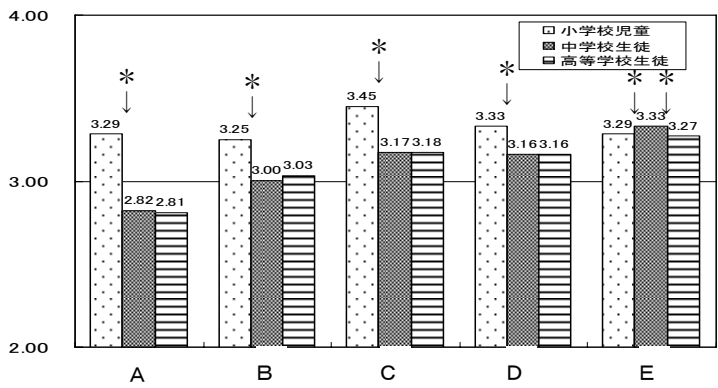


図12 児童・生徒の意識

3 開発研究

(1) 自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点 (図13)

発達段階		I 就学前教育【児童前期】	II 小学校 低学年	
観点	項目	指導上の留意点		
A 自分への気付き	活動の評価し、その子自身を認めます。	○自分の思いで取り組んでいたりと、できるようになったり、新しいことにチャレンジしたりしていることを評価します。	○自分のことは自分で行っていたり、自分でやろうと決めて行動したりしていることを評価します。	○新しくできたことがあ返し努力したりしています。
	活動を自己決定させます。	○自分から遊びや仕事を選んで取り組めるようにします。	○自分で考えたことを表現しながら、活動を選んで実行できるようにします。	○自分の得意せる場を考り組めるよ

図13 自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点 (一部抜粋)

① 資料作成の目的

幼稚園から高等学校の各教科等の指導・援助において、幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を育てるための視点を明確にし、教員が日常の指導の中で、意識して取り組む内容を示すことを目的とした。

また、幼稚園から高等学校までの指導・援助の留意点を示すことで、教員が発達段階に応じた一貫した指導を行うことができるようにすることを目的とした。

② 各観点の内容

自尊感情を高めるための観点については、学校等における指導・援助で配慮することとして、自尊感情を高めるための5観点について、以下のことを教員が日常の指導の中で、意識して取り組むことが重要であると考えた。

各観点について、2～3項目の配慮事項を設定した。配慮事項については例として示しており、各学級、学校等の幼児・児童・生徒の実態や発達段階に応じて、工夫して指導を行うことが望ましい。

A 自分への気付き

「その子自身を認める」「自己決定させる」「ルールや目標をもたせる」

B 自分の役割

「役立っていることを実感させる」「できる自分を意識させる」「周りの人からの肯定的な評価を受ける場を設定する」

C 自分の個性と多様な価値観

「自分の考えを大切にさせる」「多様な価値観を理解させる」

D 他者とのかかわりと感謝

「多様なかかわりを経験させる」「周りの人に支えられていることを実感させる」

E 自分の可能性

「できたことを実感させる」「否定的な面に対する気持ちを切り替えさせる」「他者との同様に気付かせる」

また、発達段階に応じた指導方針として、発達段階の特徴や発達課題等に関する基礎研究から、次のような指導が必要であるととらえた。

I 就学前教育【児童前期】

活動の中で自分を見付ける指導

II 小学校教育【児童期】

低学年：相手とのかかわりの中で、自分の存在に気付かせる指導

中学年：小集団や学級内で自分ができることに気付かせる指導

高学年：集団の中での自分の役割や存在感を感じさせる指導

III 中学校教育【思春期】

多様な考え方の受容と自分の個性の価値を理解させる指導

IV 高等学校教育【青年期】

自己を見つめ、社会生活における適性を確認させる指導

③ 本資料を活用する上での配慮事項

本資料は、各教科等の指導において意識して取り組む留意点を例として示している。幼児・児童・生徒の実態や学習内容等に応じて、観点の重点を定めて指導することも効果的であると考えられる。指導においては、各観点の留意点を踏まえた学習活動や形態、発問等を工夫していくことが必要である。

ただし、5つの観点をバランスよく幼児・児童・生徒に感じさせることが自尊感情を高めるために重要であると考えている。そこで、1つの観点のみに指導の重点がおかれ過ぎないように、本資料を指導の評価として活用していくことが望ましい。したがって、学習（保育）指導案等に自尊感情や自己肯定感を高めるための視点を示し、意図的・計画的に指導・援助を進めることが大切である。

(2) 検証授業

① 幼稚園における検証保育

都内公立幼稚園の4歳児を対象として、12月に「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を基に保育計画を作成し検証保育を行った。

ア 保育計画（表3）

保育計画の作成に当たっては、幼児が自立に向けた豊かな活動ができるよう、指導上の留意点として、すべての観点を重視した。中でも、自分の思いをもって活動する等「A 自分への気付き」、集団での活動の中で自分を大切にする「C 自分の個性と多様な価値観」、多様なかかわりを通して遊ぶ楽しさを実感させる「D 他者とのかかわりと感謝」の3観点について、特に重視して指導した。

表3 保育計画 4歳児「プレイランドで遊ぼう」（抜粋）

主な活動	○具体的な指導の手だて	※自尊感情を高めるための留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年長児の店や乗り物で遊ぶ。</li> <li>○ 自分たちの店などで遊ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一人一人の幼児が、自分で行きたいところ、したいことを決めているか確認する。自分から動き出せない幼児には、プレイランド当日の楽しかったことを思い出せるような話をしたり、教師も一緒に遊びに行ったりして、遊び出せるきっかけをつくる。</li> <li>○ 一緒に遊んだり、様子を見守ったりして幼児が楽しんでいることを認め、共感する。</li> <li>○ 一緒に遊びながら、実際に年長児や年少児とやりとりをして、遊びに必要な言葉を知らせたり、気付かせたりする。</li> <li>○ 必要なもの（お金や自分たちの店の品物など）が足りなくなったら、作れるように材料を出しておく。</li> <li>○ 一緒に遊ぶ友達同士で、役割分担や、動き方など遊びに必要なことを決めているか確認しながら、共通になるようにして、友達と一緒に遊びを進めるにはどのようにしたら良いか知らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※A-1:自分の思いで取り組んでいた、できるようになったり、新しいことにチャレンジしたりしていることを評価する。</li> <li>※A-2:自分から遊びや仕事を選んで取り組めるようにする。</li> <li>※C-1:自分でやりたい遊びを選び、自分のよさを発揮できるようにする。</li> <li>※C-2:同じ遊びでもやりたい子とやりたくない子がいることに気付かせる。</li> <li>※D-1:友達等がいることで、活動が楽しくなったり新しいことを見付けたりできることに気付かせる。</li> <li>※E-1:一人でできたことや友達にしてあげたことに気付かせる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 片付ける。</li> <li>○ トイレ、手洗い、うがいをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 続きができるようにするには、どのように片付けたら良いか、幼児と相談しながら具体的に、明日もやりたいという気持ちで取り組めるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※B-2:片付けや準備等、自分でできることを最後まで行わせる。</li> <li>※A-3:生活の仕方等のきまりを守って行動できるようにする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゲーム（貨物列車）をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジャンケンの理解に個人差があるので、必要に応じて勝ち負けを知らせたり、動きを促す言葉かけをしたりする。</li> <li>○ 列の先頭に、普段あまり自分を出せない幼児がなった場合は、特に認める言葉かけをして、少しでも自信がもてるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※D-2:友達等と共に活動し、遊び方を工夫したり、ルールを決めたりして、人との多様なかかわりができるようにする。</li> </ul>

イ 検証保育のまとめ

一人一人の幼児への対応の中で、「自分で考えてできるように」することを重視し、次のような具体的な教員の援助が見られた。

- 行動を褒める。
- 一人一人に役割をもたせる。
- 一緒に活動しながら、声をかける。
- 他とのかかわりの中で、楽しませる。
- 困った時等、自分で考えさせ、行動を促す。
- うまく伝えられない幼児の気持ちを代弁して伝えたり、思いを寄せたりする。

② 小学校における検証授業

都内公立小学校の第6学年児童を対象として、12月に算数科で、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を基に指導計画を作成し検証授業を行った。

ア 指導計画（表4）

指導計画の作成に当たっては、多様な考え方を基に、立体の体積の求め方を理解する展開のため、児童が自分の考えを明確にもち、学習に主体的に取り組むことができるよう、指導上の留意点として、「A 自分への気付き」及び「C 自分の個性と多様な価値観」「E 自分の可能性」を重視した。

表4 指導計画 第6学年「立体のかさの表し方を考えよう」（抜粋）

	学習活動・学習内容	○指導上の留意点	※自尊感情を高めるための留意点
導 入	1 前時の復習をし、体積の求め方を確認する。	○ 求めることや分かっていることを書かせることによって、問題を意識させる。 ○ 体積を求めるために必要な条件を考えさせる。	※A-1: 前回新たに身に付けたことを理解していたり、思い出したりしていることを評価する。 ※A-2: 既習内容を振り返り、解決するために必要な条件を考えさせる。
	2 提示された問題を理解し、課題を把握する。		
展 開	3 課題を解決する。	○ 既習事項を生かして解決するよう指示する。 ○ 立式等に課題がある児童には個別指導を行う。	※C-1: 他人と違っていても、自信をもって発表したり、取り組んだりする場面を設定する。  ※C-2: 協力して行う作業等で、相手の考えを認めた上で活動させる大切さに気付かせる。
	4 グループで意見交換する。	○ 互いの解決方法を伝え合い、新たな考え方や似ている考え方等に気付かせる。	
	5 全体発表・検討をする。	○ 発表を聞きながら自分の考えと似ている点や異なる点を見付けるように促す。	
	6 類題を解く。		
ま と め	7 本時の学習をまとめる。	○ 「新しく知ったこと」や「前の学習を生かしている解決方法、分かりやすかった解決方法、次回使ってみよう解決方法」という観点を示し、具体的に書くように促す。 ○ 机間指導をしながら児童の反応を把握し、様々な方法があることよさに気付いている感想を全体に紹介する。	※E-1: 結果から自分を振り返り、達成度に応じて新たな目標があることに気付かせる。 ※E-2: 間違いを恐れずに、目標に向かって活動する姿勢を評価する。



イ 検証授業のまとめ

児童が自分の考えを明確にもって学習に主体的に取り組むことや友達の様々な考え方のよさに気付くことを重視する中で、次のような教員の指導が見られた。

- 解決する条件を考えさせるよう、提示資料を工夫する。
- よい考え方を紹介する。
- 自分で調べさせる。
- 友達と相談しながら、解決させる。
- 一人の児童の疑問を全体に紹介する。

③ 中学校における検証授業

都内公立中学校の第1学年生徒を対象として、11月に美術科で、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を基に指導計画を作成し検証授業を行った。

ア 指導計画（表5）

指導計画の作成に当たっては、対象が1年生であること、そして、浮き彫りによる制作を行うため、道具の使い方や制作手順を理解するだけでなく、材料の特性に対する理解を深め、自己の表現を高めることができるよう、「A 自分への気付き」及び「B 自分の役割」を重点とした。

表5 指導計画 第1学年「浮き彫りによるネームプレートの制作」（抜粋）

	学習活動・学習内容	○指導上の留意点	自尊感情を高めるための留意点
導入	1 切り出し刀の使い方、浮き彫りの技法の重点を確認する。 2 各グループで実際に彫刻刀の使い方を確認し、アドバイスし合う。	○ 技法や道具の使い方を、各グループで確認させる。 ○ 道具の使い方や考え方等を肯定的にとらえて、互いにアドバイスさせる。	※A-3:グループ学習では互いの活動を肯定的にとらえて取り組ませる。 ※B-2:グループ学習での発言に責任をもたせ、相手にアドバイスできるようにさせる。 ※B-3:グループ学習では、互いの作品や道具の使い方について肯定的に認めさせる。
展開	3 個人制作 文字と物の重なり以外の周囲を彫る。	○ グループ学習で確認した道具の使い方や技法上の重点を意識させながら、取り組ませる。 ○ 各グループの中で正しく道具を使い、彫り方を理解しながら取り組んでいる生徒を紹介し、周りの生徒にそのよさを確認させる。	※A-2:グループ学習で確認した内容を目標にして自己の制作に取り組ませ、できるようになった点を確認させる。 ※B-1:各グループにリーダーをおき、グループ全員で技能や表現力の高まりを確認させる。
まとめ	4 本時の学習を振り返り、ワークシートに自己の課題、次時の目標等を記入する。	○ 自己の取組について肯定的にとらえさせ、自己評価を行わせる。	※A-2:ワークシートに毎時間の自己の制作における目標や課題を記入させ、自己の制作について今後の方向性を明確にさせて、展望をもたせる。

イ 検証授業のまとめ

生徒が、自分で考えて取り組むこととともに、見通しをもったり、技能等のコツを理解したりしながら安心感をもってできるようにすることを重点に指導し、人とのかかわりを取り入れながら、次のような教員の指導が見られた。

- グループ活動の中で、代表者が手本となり、互いに見合うようにする。
- できた部分を褒めるとともに、さらによりよい活動への指示を与える。
- 個別に「できたこと」、「大丈夫なこと」の声かけをする。
- 活動や技術のコツを与える。
- 失敗しやすいポイントを伝える。

④ 高等学校における検証授業

都立高等学校の第2学年生徒を対象として、12月に保健体育科で、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を基に指導計画を作成し検証授業を行った。

ア 指導計画（表6）

指導計画の作成に当たっては、生徒が所属するチームでの活動を通して、互いのよさを認め合い、自分の役割を明確にして学習に取り組むことができるとともに、自主的に考え、判断していくことができるよう、すべての観点を重点とした。

表6 指導計画 第2学年女子 保健体育「球技（サッカー）」（抜粋）

	学習活動・学習内容	○指導上の留意点	※自尊感情を高めるための留意点
導入	1 前回と同様の流れで活動を進めることを理解する。	○ 前回の反省を改善して進めさせる。	※A-2:ゲームや練習の中の主体的な学習を通して、自らの役割を果たしチームに貢献する場面や方法を考えさせる。
展開	2 グループごとにウォーミングアップを行う。	○ グループごとに準備体操と簡単なパスやドリブル練習を主体的に行わせる。	※B-1:自らが周囲に配慮して行動することで、チームや集団の活動がうまく進んでいくことを自覚させる。 ※B-2:所属する集団の活動に主体的にかかわることで、集団に貢献することの意義や喜びを実感させる。
	3 グループのスキルテストをする。 ・コーンを2個使用し、8の字ドリブルをリレー形式で行う。	○ 時々周囲を見ながらドリブルさせる。	※A-1:簡単なボール扱いやスキルテストを毎回繰り返して行い、自らの成長に気付かせる。 ※C-1:それぞれの役割を積極的に果たそうとして行動することが大切であることを理解させる。
まとめ	4 ゲームをする。 ・3グループで1チーム	○ ポジションなど個人の役割が明確な作戦を立てさせる。	※E-2:成就感や達成感が高いほど、新たな課題や次の活動に意欲的に取り組めることに気付かせる。 ※D-2:所属する集団を組織として意識させ、一人一人が適性に合った役割を遂行することの重要性を考えさせる。
	5 本日のゲームの良かったところを振り返る。	○ 自己やチームの仲間の取組について肯定的にとらえさせ、自己評価を行わせる。	※B-3:互いの考え方や行動、目標等を肯定的に評価し合うことができるようにする。 ※E-3:できないことがあっても、誰もが同様に悩みを抱えていることに気付かせ、孤独感や無力感を和らげる。

イ 検証授業のまとめ

生徒が学習のねらいの達成を目指して、自分たちで考え、判断し、自主的に学習が進むように工夫するとともに、人とのかかわりを取り入れながら、一人一人の役割を明確にするよう、次のような教員の指導が見られた。

- リーダーを中心に作戦を考えさせる。
- 互いに貢献したことを見るように指示する。
- 明確に活動の指示を与え、生徒の自主性を尊重して進める。
- 一人一人の生徒が自分の役割を意識できる場面を設定する。

(3) 自尊感情を高めるための指導モデル

① 資料作成の目的

検証授業や基礎研究等を基に、幼児・児童・生徒の自尊感情を高める指導・援助を進めるために、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を活用した展開例として示したものが、指導モデルである。（表7）

自分の考えをもって活動を決定するような場面や自分の役割をもち、学んだことや活動したことを満足できるような場面、友達との多様なかかわりを通して、意見を交換したり、認め合ったりする場面等を設定することを、時間の流れに合わせて示している。

この指導モデルを参考にすることで、教員が各教科・領域等の指導・援助において、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための意図的・計画的な指導ができることを作成の目的とした。

表7 自尊感情を高めるための指導モデル（例：中学校第1学年 美術科） ※3観点活用

	学習活動・学習内容	○指導上の留意点	自尊感情を高めるための留意点
導入	1 切り出し刀の使い方、浮き彫りの技法の重点を確認する。	○ 技法や道具の使い方を、各グループで確認させる。	
	2 各グループで実際に彫刻刀の使用方法を確認し、アドバイスし合う。	○ 道具の使い方や考え方等を肯定的にとらえて、互いにアドバイスさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* グループ学習では互いの活動を肯定的にとらえて取り組ませる。</li> <li>* グループ学習での発言に責任をもち、相手にアドバイスできるようにさせる。</li> <li>* グループ学習では、互いの作品や道具の使い方について肯定的に認めさせる。</li> </ul>
展開	3 個人制作文字と物の重なり以外の周囲を彫る。	○ グループ学習で確認した道具の使い方や技法上の重点を意識させながら、取り組ませる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* グループ学習で確認した内容を目標にして自己の制作に取り組ませ、できるようになった点を確認させる。</li> </ul>
		○ 各グループの中で正しく道具を使い、彫り方を理解しながら取り組んでいる生徒を紹介し、周りの生徒にそのよさを確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 各グループにリーダーをおき、グループ全員で技能や表現力の高まりを確認させる。</li> </ul>
まとめ	4 本時の学習を振り返り、ワークシートに自己の課題、次時の目標等を記入する。	○ 自己の取組について肯定的にとらえさせ、自己評価を行わせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ワークシートに毎時間の自己の制作における目標や課題を記入させ、自己の制作について今後の方向性を明確にさせて、展望をもたせる。</li> </ul>

A-3 : 活動のルールや目標をもたせませます。

B-2 : 自分の力であることに気付かせませます。

B-3 : 周りの人からの肯定的な評価を受ける場を設定しませます。

A-2 : 活動を自己決定させませます。

B-1 : 自分が周りの人の役に立っていることを実感させませます。

A-2 : 活動を自己決定させませます。

E-1 : できたことやその過程を認め、達成感や充実感を味わわせませます。

## ② 活用の方法

ア：指導内容等を踏まえ、重視したい自尊感情を高めるための観点や項目、留意点を「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を基に決定する。

イ：本時の展開における学習内容や形態等に応じて、重視する留意点を踏まえた学習活動や指導方法等を工夫する。

ウ：学習のねらいとともに自尊感情を高めるための留意点を意識した指導を実施する。

エ：指導後の幼児・児童・生徒の変容を把握するとともに、指導を評価し、指導の改善を図る。

## 4 研究の考察

### (1) 教員の指導の変容

教員が自尊感情を高めるための5観点を踏まえた指導をすることで、授業（保育）中における指名の仕方、幼児・児童・生徒の意見の受け止め方、次の活動への指示の仕方等で、幼児・児童・生徒を肯定的に受け止める意識が強くなったことが、検証授業を実施した教員からの聞き取り調査によって明らかになった。また、グループ活動や互いに作業を教え合う活動等、幼児・児童・生徒が互いにかかわり合いながら学習を深めることができるよう、多様な学習形態や活動を積極的に取り入れるようになったことも分かった。

以上のことから、日常の指導・援助の中で、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための観点を意識することで、教員自身の積極的な授業改善が図られるとともに幼児・児童・生徒の受け止め方等が肯定的になり、一人一人を大切にされた指導・援助が充実することが期待できる。

### (2) 教員の自尊感情の重要性

子供たちにとって「重要な他者」である教員自身が自分に対して自信や自尊感情をもって指導することが、幼児・児童・生徒の自尊感情に影響することが、様々な研究の中で述べられている。本研究においても、調査委員による検証授業後の聞き取り調査から、教員が自信をもって指導・援助していくことで、幼児・児童・生徒の言動の受け止め方が変わる等の意見が多く挙げられた。

教員の自尊感情と幼児・児童・生徒の自尊感情とのかかわりについて、学校における人間関係や指導環境等を踏まえて検討していくことで、研究がさらに深まると考える。

### (3) 脳科学等の視点を踏まえた教育の必要性

本研究を進める中で、自尊感情を高める上で効果的な指導の時期や内容があるのではないかという議論が高まった。そこで、次年度以降、自尊感情を高めるための研究を進めるに当たって、脳科学等の視点を踏まえ、科学的な側面から学校における指導・援助の在り方を検討することも必要であると考え。文部科学省では、「脳科学と教育」研究に関する検討会を設置し、「脳科学と教育」研究の進め方について検討を進めている。さらに、情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会（情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会 報告書 平成17年10月）では、「脳科学と教育」の研究を基に、子供の情動やこころの発達上の諸問題について議論し、各学問分野間の連携の在り方や、研究と教育等の実践現場との連携の在り方等について検討してきた。

今後、本研究においても、心の発達と関連の深い自尊感情の高まりを、脳科学等の視点から

効果的な指導・援助の在り方を探ることが重要であると考え。

#### (4) 地域・家庭との連携の必要性

幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるためには、学校における指導・援助とともに、家庭・地域との連携を図ることで、より効果的になると考える。保護者会等で、子供が自分自身を肯定的に受け止めるとともに、他者を認めることができるようになり、自信をもって新しいことに挑戦していくことができるようにすることの大切さを、本研究の自尊感情を高めるための5つの観点を基に伝えていくことが考えられる。

＜地域・家庭に伝えたい5つの観点＞

- ・自分の存在に気付くとともに、自分のことを受容できるようにすること
- ・自分の役割を理解し、存在感を感じることができるようになること
- ・自分の個性を認めるとともに、他者の多様な価値観を認めることができるようになること
- ・自分が周りの人に支えられた存在であることを理解し、感謝できるようにすること
- ・自分の可能性を信じ、努力できるようにすること

### IV 研究の成果と課題

#### 1 研究の成果

##### (1) 幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点の明確化

幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための指導上における留意点を5観点から示し、各教科・領域等の指導・援助において自尊感情や自己肯定感を発達段階に応じて高めることができるようにした。この資料を基に、幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための指導・援助を教員が意識的に行うことができる。

##### (2) 児童・生徒の自尊感情の傾向の把握

調査研究を通して、児童・生徒の自尊感情の傾向を、自尊感情を高めるための5観点を基づいて把握することができた。この結果を基に、児童・生徒の発達段階や自分に対する意識の傾向に応じた指導を明確にすることができ、指導内容を工夫することができる。

##### (3) 自尊感情を高めるための指導モデルの開発

「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」を生かした指導モデルを開発した。指導モデルを参考にすることで、学校等において幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導・援助の工夫を進めることができる。

#### 2 研究の課題

##### (1) 継続的な指導実践と指導・援助の有効性の検証

開発資料の検討を継続し、指導・援助の効果及び有効性を引き続き検証する。

##### (2) 脳科学等の視点を踏まえた発達段階に応じた指導・援助の明確化

大学等との専門機関との連携を図りながら、脳科学等の研究成果を踏まえた自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導・援助の在り方を具体的に示す。

##### (3) 教員の自尊感情と幼児・児童・生徒の自尊感情との関連の検証

教員の自己に対する意識と幼児・児童・生徒の自尊感情との関連について明らかにする。

##### (4) 地域・家庭との連携と開発資料の活用

幼児・児童・生徒の自尊感情を高めるための地域・家庭との連携の在り方を明確にする。

参考資料Ⅰ 自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点

自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点 (試案)

発達段階	II 小学校教育【児童期】			III 中学校教育【思春期】	IV 高等学校教育【青年期】
	I 就学前教育【児童前期】	低学年	中学年		
A 自分への気付き	1 活動の評価し、その子自身を認めさせます。	○自分の思いで取り組んでいたり、自分でやろうと決めて行動したりしていることを評価します。	○新しくできようになったことがあったり、繰り返したり努力したり、工夫したりしていることを評価します。	○前回できなかったことができて、できるようになったり、努力して取り組んでいることを評価します。	○既習内容を繰り返し確認したり、前回できなかったことができて、できるようになったり、努力して取り組んでいることを評価します。
	2 活動を自己決定させます。	○遊びや仕事を自分で取り組むことができようようにします。	○考えたことを表現しながら、活動を選んで取り組むことができるようようにします。	○今、何ができているのか考え、確実に取り組むことができるようようにします。	○自分の特性や役割を果たし集団に貢献する場面や方法を考えることができるようようにします。
	3 活動のルールや目標をもたせします。	○生活の仕方等のきまりを守って行動できるようにします。	○学校のきまりを守って行動できるようにします。	○学級で考えたきまりを守って行動できるようにします。	○集団の活動の目標達成に向けて責任をもち、自ら努力できるようにします。
B 自分の役割	1 自分が周りの人の役に立っていることに気づかせます。	○保護者や友達等、周りの人のために行動できたことに気づかせます。	○班等の友達のための活動を考え、実行できたことに気づかせます。	○自分たちで作った組織のルールを自主的に守って活動できるようにします。	○自分が周囲に配慮して行動することを、所属する集団の活動がうまく進むことに気づかせます。
	2 自分の力のできることを認めます。	○片付けや準備等、自分でできることを最後までやります。	○家族や学級内の中で自分でできることを考えて実行させます。	○学級全体や学校全体がまとまることと学級や学校の活動がスムーズに進むことを大事にして活動できるように気づかせます。	○所属する集団の活動に主体的にかかわり、集団に貢献することの意義や喜びを感じ、行動させます。
	3 周りの人からの肯定的な評価を受取る場を設定します。	○遊んだことや考えたことをみんなの前で紹介し、友達から認められるようようにします。	○グループ活動で、互いのよさを認め合えるようようにします。	○様々な活動で、互いの考え方を認めるようようにします。	○互いの考え方や生き方、目標等を肯定的に評価し合えるようようにします。
C 自分の個性と多様な価値観	1 自分の考えを大切にさせます。	○やりたい遊びを選び、自分のよさを発揮できるようにします。	○自分には得意なことやよいところがあることに気づくことにも、頑張り、自分の考えを大事にできるようにします。	○学級や様々な集団の活動において、自分の個性を積極的に発揮することを大切にできるようにします。	○それぞれの特長や役割を積極的に果たそうとして主体的に行動することを大切にできるようにします。
	2 考え方や行動の多様性を理解させます。	○同じ遊びでもやりたい子とやりたくない子がいることに気づかせます。	○やりたいことや好きなことは一人一人違うことに気づかせます。	○同じ事柄でも、いろいろな考え方や感じ方があることを理解し、互いに調整して、よりよい活動を考えて、この大切さに気づかせます。	○自己の適性を見つめ、行動することが大切であることを理解し、多様な行動の仕方や目標を認めることができるようようにします。
D 他者との関わりと感謝	1 グループで話したり活動したりして、多様なかわりを体験させます。	○友達と共に活動し、遊び方を工夫したり、ルールを決めたりすることができるようようにします。	○班や当番等のグループで、きまりを決めて話し合ったり活動したりすることができるようようにします。	○班や当番等のグループで、考えをまとめたり仲間と協力して活動したりすることができます。	○所属する集団を組織として意識し、各自が目標をもち、適性に合った役割を決めたり、互いに尊重したりしながら主体的に行動することができるようようにします。
	2 周りの人へ支えられていることを実感させます。	○友達等がいることで、仲間、仲良し、一緒に話し合ったり活動したりすることが送れることに気づかせます。	○友達等がいて、学校生活が楽しくよりよい学校生活を送れることに気づかせます。	○友達等がいて、学校生活が充実していることにも、一人一人の活動は、一人の人の助けがあって成り立っていることに気づかせます。	○集団の仲間等、身近な人達の支えがあって、自分の目標が実現していることに気づかせます。
E 自分の可能性	1 できたことやその過程を認め、達成感や充実感を味わわせます。	○一人でできたことや友達にしてあげたことに気づかせます。	○繰り返し努力して、できるようになったことに気づかせます。	○目標をもって取り組む、困難を克服したことを理解し、実行していることを評価します。	○達成感や達成感を味わうために、新たな課題や次の活動に意欲的に取り組んだこと(生かした点)に気づかせます。
	2 否定的な面に対する気持ちを切り替わせます。	○失敗や間違いをしても頑張っていることを評価します。	○失敗や間違いを恐らずに取組んでいくことを評価します。	○失敗や間違いを恐らずに、目標に向かって主体的に活動していることを評価します。	○失敗や間違いを恐らずに、目標に向かって主体的に活動していることを評価します。
	3 困っていること等は他者もあつたと気づかせます。	○やりたいこと等を我慢することには、他の子も同じであることに気づかせます。	○得意な子も苦手な子も一生懸命努力して取り組んでいることに気づかせます。	○困難なことや悩んでいることは、他の友達も同じようであり、工夫して乗り越えていることに気づかせます。	○得意なことや悩んでいることは、他の友達も同じようであり、工夫して乗り越えていることに気づかせます。

参考資料Ⅱ 自尊感情を高めるための指導モデル

自尊感情を高めるための指導モデル（例：中学校第1学年 美術科） ※3観点活用

	学習活動・学習内容	○指導上の留意点	自尊感情を高めるための留意点
導入	1 切り出し刀の使い方、浮き彫りの技法の重点を確認する。	○ 技法や道具の使い方を、各グループで確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* グループ学習では互いの活動を肯定的にとらえて取り組ませる。</li> <li>* グループ学習での発言に責任をもたせ、相手にアドバイスできるようにさせる。</li> <li>* グループ学習では、互いの作品や道具の使い方について肯定的に認めさせる。</li> </ul>
	2 各グループで実際に彫刻刀の使い方を確認し、アドバイスし合う。	○ 道具の使い方や考え方等を、肯定的にとらえて、互いにアドバイスさせる。	
展開	3 個人制作文字と物の重なり以外の周囲を彫る。	○ グループ学習で確認した道具の使い方や技法上の重点を意識させながら、取り組ませる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* グループ学習で確認した内容を目標にして自己の制作に取り組ませ、できるようになった点を確認させる。</li> <li>* 各グループにリーダーをおき、グループ全員で技能や表現力の高まりを確認させる。</li> </ul>
		○ 各グループの中で正しく道具を使い、彫り方を理解しながら取り組んでいる生徒を紹介し、周囲の生徒にそのよさを確認させる。	
まとめ	4 本時の学習を振り返り、ワークシートに自己の課題、次時の目標等を記入する。	○ 自己の取組について肯定的にとらえさせ、自己評価を行わせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ワークシートに毎時間の自己の制作における目標や課題を記入させ、自己の制作について今後の方向性を明確にさせて、展望をもたせる。</li> </ul>

A-3: 活動のルールや目標をもたせます。

B-3: 周りの人からの肯定的な評価を受けられる場を設定します。

B-2: 自分の力でできることがあることに気付かせます。

A-2: 活動を自己決定させます。

B-1: 自分が周りの人の役に立っていることを実感させます。

A-2: 活動を自己決定させます。

E-1: できたことやその過程を認め、達成感や充実感を味わわせます。

参考資料Ⅲ 自尊感情に関する調査用紙（中学校・高等学校生徒用）

自尊感情に関する調査（中学校・高等学校 生徒用）

あなたはふだん、自分のことについてどのように思っているかうかがいます。次の1～18の内容について当てはまるところに○を付けてください。

【4：そう思う 3：どちらかというと思う 2：どちらかというと思わない 1：思わない】

1 わたしは、できないことや難しいと思うことがあっても、できるように努力して取り組んでいます。	4	3	2	1
2 わたしは、自分もっている力を意識しながら、様々な場面で行動しています。	4	3	2	1
3 わたしは、自分たちで作ったルールを守って行動しています。	4	3	2	1
4 わたしは、学級や学校の活動がうまくいくことを大事にして活動しています。	4	3	2	1
5 わたしは、その場に応じて何が正しいかを自分で判断し、責任をもって行動しています。	4	3	2	1
6 わたしは、グループで活動するとき、友達の考え方や行動を認めています。	4	3	2	1
7 わたしは、学級や様々な集団の活動において、自分なりに考えたことを表現することが大切だと思います。	4	3	2	1
8 わたしは、同じ事柄 <small>こと</small> に対して、人によっていろいろな考え方があることはよいことだと思います。	4	3	2	1
9 わたしは、様々な考え方を生かして行動しています。	4	3	2	1
10 わたしは、先生や友達など <small>まわ</small> りの人がいることで学校生活が充実しています。	4	3	2	1
11 わたしは、学級や様々な集団の活動において、互いに考えを尊重し合って内容や方法等を決めて行動しています。	4	3	2	1
12 わたしは、先生や友達など <small>まわ</small> りの人に支えられていることに感謝しています。	4	3	2	1
13 わたしは、努力することで、目標が実現できると思います。	4	3	2	1
14 わたしは、誰にでも困難だと思っていることや悩んでいることがあります。	4	3	2	1
15 わたしには、できるようになって満足した経験があります。	4	3	2	1
16 わたしには、得意なことがあります。	4	3	2	1
17 わたしには、よいところがあります。	4	3	2	1
18 わたしは、自分のことが好きです。	4	3	2	1

質問は以上です。ありがとうございました。

※ 小学校児童用の調査用紙は、項目の内容等は変えず、文言を児童用に平易にしたものを作成し使用した。

※ 教員用の調査用紙は、児童・生徒用の調査項目に関する状況及び自尊感情を高めるための5観点に関する指導の状況等、3設問を設定した。